

ZEN 49号 2014.8

発行・編集 全道美術協会事務局

梅津蕙方 Tel. (0126)24-1975

〒068-0835 岩見沢市緑が丘4丁目221

ホームページ <http://www.zendouten.jp>

印刷 株式会社 アイワード

全道展 ^{いま} 現在、そしてこれから

新たな伝説へのメソッド

木村 富秋



終戦の年、1945年に21名の創立会員で産声をあげた全道展も、来年、創立70周年の記念展を迎える。北海道美術界の長い歩みのなか、国内外の新しい美学、気風、流れを取り入れながら風土に根ざした精神と新進の気性を持って、会としての創造の翼を逞しく広げてきたと云えよう。創立時より、只ひたすら“いいものを創ろう”とする純粹な作家魂と、溢れんばかり

の情熱で、互いに自らの創作に打ち込んできたのであろう。心身を鍛え仕事に打ち込んでゆく力強い姿勢こそ、今私達が受け継ぐべき「会の精神」そのものなのではないだろうか。70年の長い歴史のなか、キラ星のごとく多くの誇らしい芸術家を輩出してきたと云う、そのまぎれもない事実をとってみても、そこに育まれて来たふれのない至高の精神とその輝きに、言葉に尽くせぬ深い重みのようなものを私は感じるのである。

ここ15～6年ほど前から、公募展が曲がり角を迎えていると云われて久しい。近年、若手を中心に最初から公

募展に関心のない美術家が年々増えている。いわゆる時代が生んだインスタレーションや現代美術等の表現形態、各種コンクールや美術賞、公募展以外の新たな選択肢が増えたこともある。だが以前からアンチ組織派的な無所属作家はいたわけで、団体に所属すること自体を負擔と感じたり、量に流され埋没するばかりと、敬遠の理由は人それぞれあるのだろう。しかし公募展で得られる仲間にも、作家として又、大きな意味のあることも確かなことのように私は思う。会の基本姿勢である、全会員による公正な審査、ボスをつくらず常に「作品本位」と云う、この明快なスタンスこそ全道展のポリシーであり不動の核となっているのである。正に「自立と責任」明日に向かう全道展の会員一人一人が、会に寄りかかることなく、持ち続けなければならぬ必然の責務だと云えよう。

私たちが今生きている予測不能の現代。次に何が起きるのか変化の予兆さえ無視されてしまう理不尽ともとれる苛酷な現実。よもやと思うことが一気に突き付けられてしまうこの袋小路的閉塞感に包まれた今こそ、人のもつ想像力や創造力が真に求められている時代ではないのか……未来に対する想像力の欠如や無関心を装うことが一番怖いことだと思う。確かにこれほど身のまわりの利便性が急速に進歩したと思われる現代でも、政治・経済と同次元で必要な芸術文化の意味合いが、中央・地方を問わず、未だに無理解の霧の部分があることを感じる時、清濁併せ呑む事もあるとは云え、只々残念に思うばかりである。私達は心のままに美を創る本当の楽しさ、又それが、時には人の生きる支えや喜びの基軸にもなる、かけがえのない大切な事だと云うことも知っている。自身の熱き創意に思いを巡らせ、その瑞々しい美を、自分を信じ未来に向け果敢に発信して行こう。

私達には全道展という、誇りうる素晴らしいフィールドがある。

歩く人も、走る人も、グループで熱く駆け出す一群も、それぞれの歩幅を大切に、野生に向かって時には挑み、時には悩みながら自身の濃密な表現世界のひとつひとつを力強く築き上げて行くであろう。さあ、私も新しいキャンパスの帆を張って明日に向かおう……。

第69回 全道展審査を終えて

今年の全道展は4部門の一般応募数532点。このうち入賞27点、入選は217点であった。各部門の審査委員長より感想を頂いた。

総合審査委員長
絵画部門審査委員長

高橋 靖子

4部門が各々の作品の審査を進めて行く、いつもながらの光景である。進行係の緊張感ある声が、市民ギャラリーの天井に響く程、次第に熱気を帯びて行く。中には自論を一步も譲らない勇者も居り再審査、取り直しとなる。進行係は限られた審査時間内で采配を振ることになり、いつも苦勞する。とは言え今年も無事、4部門の皆様のご協力のもと終える事が出来た。

しかし、近年の搬入点数の減少問題は気がかりである。来年の70周年記念展のタイトルを見ると一新生する全道展一とある。新生する、の意味を噛み締めて、70年の歴史ある全道展を、より魅力ある美術集団にして行く、その為に何をすべきか真剣に考えてみたい。それがこの度の審査の中で感じたことの一つである。

今年の絵画部門からは協会賞を始め、受賞者は会友賞と合わせ17名、新会友10名、新会員5名であった。

新聞等の講評以外で目を引いたのは佳作賞の中村友子の「集合」。色彩の強さ、形の自由さがある。奨励賞の安藤静枝の「嬉しい心」も思い切りのいい色の輝きが、全道展の中で数少ない表情を見せてくれた。モリケンイチのシュールな世界に一層の深まりを期待したい。会友賞の2人は実力の底に次作に繋がる創造性を感じた。

版画部門はエネルギーが豊富な作品が多い。若い出品者が増えたのだろうか。彫刻部門は例年どおり見ごたえがあり、会友作品も充実している。今後に一層の期待を持つ。工芸部門は染色作品が多くなり、全体に明るく感じた。新会員の新関千裕の繊細なガラス作品がフレッシュで美しい。

ともあれ、6月9日、10日と2日間に渡る審査は終わった。今、この原稿を書きながら、ふと全国の数多くの公募展という名の審査の有り様を想像してみた。膨大な作品の1つひとつに向き合うのは一人、その人でしかない…改めてそう思う。一年に一度の全道展も回を重ねて来年は70年、記念展開催の年です。全てが良い方向にと願わずにはいられない。

版画部門審査委員長

大井戸 百合子

近年、木版画が技術、内容ともに充実した作品が多く、レベルが上ってきている。銅版画は昨年までは少数だったが、今年は数も増え内容も幅広く面白い。唯、技術面で更に力をつけてもらいたい。他の多様な版種も数は少ないが、刺激しあうことで魅力的な展覧会になるので、版画部の可能性はまだまだ伸びて行けると思う。

個々の作品の寸評だが道新賞の武田志麻、個性的魅力に満ちている。佳作賞、佐藤一、色彩バランスの妙あり。同賞、三浦正志、下部の草に明るい黄色が欲しいところ。奨励賞、相馬瑞恵、選手の動きやユニホームの文字に一工夫を。長澤恵美子、色と形がよく合っている。

次に新会友の川口巧海の作品は銅版画の効果を生かした秀作である。同じく中嶋詩子は清冽な作風の中にもう一色、華やかさがあればと思う。

一般入選者も各々の表現に苦心している。五十嵐祐二、素直な単調さが良い。生方正俊、白と黒のバランスが良い。金澤凌、アニメと銅版の新鮮な感覚の面白さ、次作を見たい。金山道子、全体にある黒や灰色の塊が美しい色調。菊崎洋子、左手を少し入れると落ちつきが出る。久保田道子、女性の孤独感と銅版画がよく合っている。今野繁雄、南国の暑さを色に出して欲しい。佐藤拓実、描きたいテーマを持っている人、続けて制作を。佐藤麗子、幹に質感が欲しい。佐野和子、雲の彫りを下の部分にも欲しい。田中文夫、難しい色をうまく落ちつかせた。田中正次、身近なテーマを続ける、大事なことだ。谷博、下の草の部分に工夫を。富田忠征、色も沢山あり不思議な花火のようだ。もっと激しく爆発させても。長澤満、落ちついた作品、木の葉、実の工夫で淋しさが消える。南雲久美子、超現実的な魅力がある。イメージを更に膨らませて。根本壽、顔を少し見せると絵が明るくなる。長谷川易夫、迫力ある構図は良い。羽の質感に工夫を。坂東伸之、現代的センス、更にダイナミックに冒険を。蛭田綾香、バックのピンク、ブルーに濃淡の工夫を。藤林峰夫、北国の詩情、窓と板に少し変化があると更に秀作に。藤光房子、祈る女性にインドの臭いが弱い。松浦進、背後の黒を少なく。もっとススキリする。水野房江、この調子でやって欲しい。山本俊、窓の白がアクセントになり全体を引き締めた。吉田志麻、全体にもう少し彫り、白が出ると華やかさが出る。

彫刻部門審査委員長

水野智吉

工芸部門審査委員長

高橋政幸

68回展において2名（谷内健・山本美沙）の会員が新たに加わりましたが、昨年11月に橋井裕会員の突然の訃報があり、更に長年に亘って彫刻部を支え続けて来られた北村善平会員が退会され、残念ながら会員数が22名となりました。今回の審査では17名が参加し、橋井会員に黙祷を捧げることから始まりました。ここに謹んで哀悼の意を表するとともにご冥福をお祈り申し上げます。今回の一般出品者の搬入数は14点で昨年よりも4点減少し、一昨年からは10点の減少。10年前の搬入数は40点以上ありました。このことは単に出品数減の話ではなく、美術を取り巻く様々な問題が重なっている様に思います。更に今回は大きな作品が殆ど搬入されていないという状況も見られました。具象作品にはこれまで数点はあった等身大の塑造作品がなく、抽象作品にかろうじて1点大型作品があるのみでした。このサイズの面から見ても、会友と一般出品者の差が更に強まった様に感じられました。審査の結果は入選数が12点と、搬入作品の殆どが入選しました。作品は小ぶりでしたが、今後が楽しみな作家が多く出品されていたのは幸いでした。しかし受賞は、奨励賞が3名、新会友が1名のみというかなり厳選な結果に終わってしまいました。独特のテーマを持った木彫を出品し続けている竹村孝夫さんが今回も大作に挑戦し会友に推挙されました。奨励賞を受賞した方々の作品はどれもしっかりとした実力が発揮された力作でした。受賞・入選された方々の来年の作品を今からとても楽しみにしております。また、会友の作品においては、どの作品もしっかりと作り込まれており、とても充実した内容であったと思います。会友賞を受賞し、新会員に推挙された佐々木甲二さんの作品は完成度も高く、卓越した技術による見事な出来映えでした。会員としての今後のご活躍に期待いたします。来年は70周年記念展となり、一般出品の方々には記念賞が設けられることでしょうか。また、会友の方々には道立近代美術館での記念企画展にも出品して頂くことになります。来年に向けてより一層の研鑽に努めて頂き、70周年記念展での更なる大きな飛躍に期待したいと思います。

3年振りに審査に出席して感じた事は応募人数及び点数の減少は昨年から急速に進み、その原因を少子高齢化や厳しい社会情勢に転嫁しても解決せず、それでも美を追及する16名27点の応募があり11人の入選と、その中から4名の受賞作を選出しました。中には手芸のようなものもありましたが入選作は一定の水準に達していると思えました。工芸には陶、ガラス、木工、染織、金工等多様な作品の中から阿部綾子さんの「渴」は落ちついた色調と安定した形が泉を連想させる優品で佳作賞となりました。今後が期待されます。木俣猛さんの「森の囁き」は糸や織又色彩に変化を持たせた光と風を感じることが出来ました。森雅子さんの「明日の夢」は充分焼き締められた落ちついた色合いと形が内に秘めた情熱を感じます。空間的な広がりがあれば尚、良くなると思います。惜しくも選外となった中には割れ目が無ければ受賞したであろうと思うものもあり残念に思いました。今回は傑出した作品が無く会友推挙はありませんでした。次に会友の楠木康仁さんはこれまで安定した水準の高い作品を出品して居ましたが、今回は今迄と違った感覚に脱皮した作品で会友賞と会員に推挙されました。新関千裕さんの「陽に向かう」はガラスの特徴を生かした希望や明るさを素直に感じる事の出来る秀でた造形が高く評価され、会員に推挙されました。工芸会員は8人からようやく2桁の10人となり後進の育成や自身の精進を含めて心強く思います。この選評を書くに当たって過去の図録を見ると毎回30人前後の一般応募があったのに、あの人達はどうしたのだろうと思います。応募者の増加は急には望めなくても減少は今回が底と思いたい。来年から増加に転じるよう期待します。



受賞のよろこび



授賞式での皆さんの笑顔！ 6月21日(土)全日空ホテルにて

絵画部門

協会賞

岡野 修己 (釧路市)

AM 6:30…窓にたたきつける雨を眺めながら朝食をとっていた。ふと、家の前に白い車が止まりポストに何かを入れすぐ去っていきます。それは雨で文字もゆがんだ封筒、協会賞オメデトウのメッセージ、しかもコーヒー券付き。新聞発表の朝の出来事でした。

「心豊か」というのは、こんな時の気分だろうか、ゆったりとした時間が流れます。毎朝、自身のねじを巻いてさあ今日も一日、きちんと生きようと思うわけです。

北海道新聞社賞

藤田 博子 (札幌市)

絵を描く行為を今日まで続けて来たのは描きたい！と思う何かが強かったからだと思います。どうなるのかな？と描き進め一枚の絵が自分なりに描きたかったものに近づけた時、完成した喜びで満足します。しかしその瞬間、課題が出て描き始めます。この繰り返しでした。今後もこの日々が長く続けられる事を祈りつつ精進しようと思っています。

佳作賞

阿部 一真 (苫小牧市)

本作は、災害を受け哀しみ、苦悩しながらも尚立ち上がらんとする「人間」の姿、また現代社会にて人の前に立ち塞がる様々な問題、進歩発展しながらも高度に複雑な形態を見せる社会構造への不安を私の感性で描きました。閉塞的、退廃的な画面ですが、そこに忍ばせた希望をも見てとっていただけましたら僥倖です。今度とも勉強を重ね、社会に鋭く切り込んでいける作品を制作できる様、努力を続ける所存です。

佳作賞

中村 友子 (函館市)

「絵を描く事はそんなに難しく考える事はない。そこにある物があるように感じるがままに、ただ描けばいい」これはある雑誌に載っていた言葉です。あれこれ頭で考えると描けなくなってしまいます。まずはそれを黙って描き始める。描いている内にいろいろな色が見えてきたり、魅力的な所を見つけたりして面白くなって夢中になって描いている自分がいます。何もかも忘れて夢中になれる絵がある事が今の私の生活の一部、そして生きがいです。

佳作賞・新会友

中川 治 (札幌市)

数年前仕事で東京へ行く機会があり、空いた時間に上野の博物館に行き、生命の進化について見てきました。カンブリア紀から現代に至るまで長い進化を経て今があります。人類は古代からその生命の神秘に惹かれて、想像をめぐらせてきました。エジプトの神々を見ると、その想像力の豊かさを感じずにはいられません。生命の神秘と人類の想像性、そこにどれだけ迫れるかが、今の私のテーマです。

新会友

岩永 総子 (旭川市)

物価も税金も上がり、育児費用の為に働く。けれど託児環境は不十分で、職場は子供の病気や安全のリスクなど見て見ぬフリで会社の都合を押し付ける。今時沢山子供が産める女性は恵まれている。少子高齢化、税金の先細りは止められない。都合の悪いものを見ようとしなければ。表現の未熟さと構力等多くの課題を痛感する作品ですが、描くことで訴えようとした一枚です。

新会友

太田 玲子 (札幌市)

この春、転勤に伴い引越しをした。慌しい中、絵の具の紐を解きキャンバスに向かう。新しい環境で緊張していた気持ちが静まっていく。制作は時に楽しく、苦しいものだが、続けて来られたことに、そして全道展という目標があるということに感謝をしたい。北見で過ごした日々が画面にどんなふうに表示してくるのだろう。6月の札幌の空の下、会友の名に恥じない作品を描いていこうと心に誓う。

新会友

小笠原弘子 (札幌市)

日々の思いを一度、心の底に沈め改めてキャンバスに吐き出してみる。重なる絵の具、スクラッチ、迷いの線と気持だけはこもるもののまだ未熟者である。しかし自分と向き合うことで心の成長を感じる時もある。

これからも描ける事に感謝し、全道展と共に制作を続けていきたいと思えます。

新会友

佐藤 艶子 (幕別町)

私はここ暫く「壁」を主なモチーフに描いている。「壁」にはそこに住んだり利用した人達が遭遇した出来事や、やってきた事が記録されている。「壁」に出会った時、そこに秘められているドラマに思いを馳せる。今回の「弾痕」のある壁は南イタリアの小さな町の裏通りで出会った古い建物のもの。ここで展開されたであろう過酷な戦いと、きっと今もどこかで刻まれているだろう「弾痕」を告発するつもりで描いた。

新会友

中橋るみ子 (札幌市)

近郊の郊外に出かけての散策が一番の心の癒しです。野花、小鳥や木々の涼風が、ざわざわと語りかけて来る。樹間の陽光が銀色の風に輝き、季節を知らせてくれる。自然の中に包まれていると、いつの間にか、画室での小さな悩みが解けてゆく。梢の小さな葉などを観察してみると、絵の中のヒントにもなったりする。

絵を制作することが、やっと楽しくなってきたところ です。

新会友

南雲久美子 (札幌市)

一回目の出品から裸婦に拘わって描いてきました。孫が生まれた記念にと出品したのが初入選でした。その孫も28歳、すっかりオジサン化しています。

恩師の国松登先生が亡くなった年、主人が亡くなった年には落選し二重にショックでした。でも止めずに描き続けていて本当に良かった！今元気を取り戻し得たのは絵があったお蔭だと思っています。

これからも裸婦と向き合って描いていきたいと思います。

新会友

松田 悦子 (函館市)

この度は会友に推薦していただきありがとうございます。全道展に作品を出品してから色々ありましたが、会友として気持を新たに自分らしさを表現できる作品を制作できる様に努力して行きたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

新会員

有坂 きえ (札幌市)

日暮れに鶏小屋の戸を締めに行った時下駄ばきの足の下が異常に軟かい。朝、ひよこを踏みつけた事に気づいた。以来鳥を凝視する事も触る事もだめ。熱にうなされると羽根が頭に降ってくる。気味が悪く恐ろしい。しかし憧れや希望を表す時、彼等が大きな翼を広げて大空に舞う。空は送電線が陣取り擬形の人物が農民を嘲笑している。農業改革に惑わされる悔しさを訴え叫びたい。こんな気持ちが表現できればいいと思う。

新会員

大友 和子 (石狩市)

包み込んで、とき放す潮風、浜の女の瞳に海の蒼さ。わたしは、遅く生きる女を描くのが好きです。

父は戦争で千島列島北端の占守島の警備、戦後もシベリヤ抑留生活を強いられていた。貧困生活の子育ての母の姿を思い浮かべる。構成には時間をじゅうぶん掛けるが単調にならないようにと色彩に深みを与えるよう工夫した。そのうち、華やいだ楽しい色彩で描きたいと願っている。

新会員

西村 徳清 (羽幌町)

大学時代、君の作品は俗っぽいな、という講評にショックを受けたことがあります。(今はその意味も理解しますが) この、他ゼミの先生の言葉に対し今は亡き師、本庄康伸先生(全道展退会)はひどく憤慨され「絵を描くとは芸術の神に平伏すようなものだよ西村君…何が俗っぽいのか!」と強く励ましてくださいました。全道展会員となった今も、言葉の真意を汲み取りきれはませんが、甘い絵作りを戒めてくれています。

新会員

やまだ乃理子 (苫小牧市)

作品は、作者の視点や精神状態などが露出する。自分の内部に目を向け、何がしかの自分が、形になって作品に反映される。内の中に外を持っている。異空間—私の原風景のようなもの。無機物、有機物、どちらにも魂があると感じている。対話しながら制作をしている。

会友賞・新会員

尾澤 和子 (旭川市)

手作りの時もありますが、市販の木枠にラワンベニヤを付けます。下地づくりを終えると、色付けをしていき、床に置く、立てるを繰り返して進行していきます。ただのベニヤが、どんどん変化し、ついに作品となっていく。会場での対面。言葉にならない程複雑な気持ちになりました。これからも、一層の精進を重ね、制作してまいります。

会友賞

佐藤 静子 (苫小牧市)

題名の「パンタ・レイ」について。3年前の大震災の映像をパリのホテルのテレビで観ていた。大きな川の様になった大地を、車も家も木も茫々と流され、まるでノアの箱船伝説の映画のようであった。日本から遠く離れていたせいか現実感がまるでない。何かが地球規模でゴロンと一回転したような気がした。そして天啓のようにこの言葉が浮かんだ。ヘラクレイトスの言葉で「万物は流転する」の意です。

版画部門

道新賞

武田 志麻 (赤井川村)

「雲海のシンフォニー 春」は、季節ごとに変化していく里山の色彩を追った4作品のシリーズです。雲海の幻想的で神秘的な景色をテーマに試行錯誤を繰り返しました。自然への畏怖や恵みへの感謝に対して、すこやかな表現を目指し、私を生かしてくれるさまざまな恵みに、版画で応えたいと思っています。

佳作賞

佐藤 一 (札幌市)

木版画との出会いは、道新文化センターの玉村教室。未経験の私が先生のご指導のもと、5年後に全道展に初出展。耳を疑う結果に仰天。スケッチ旅行で滝川市の丸加高原を見たときはそのスケールに感動。しかし表現が難しく制作に取りかかるまで1年以上を要した。思いの色が出せずに苦勞したが、概ね近い感じにはなったと妥協。受賞は、私にとって今後の大きな励みとなるが、同時に重く、身が引き締まる思いである。

佳作賞

三浦 正志 (北広島市)

単なる一版画ファンが、第2の人生スタート時、思わぬ機会から師を得て、今は無我夢中の世界にいます。

以前から、近現代史の中で夢破れ埋もれて行った人々の痕跡に印象を受け、離農廃屋、閉鎖工場、閉山炭鉱等が素材として多くなり、特に廃坑を巡ると草むす封鎖坑口の奥から「俺達を忘れないでくれ」との叫びが聞こえるようで、当分このテーマから離れられないと思います。

新会友

川口 巧海 (札幌市)

私が見つめるものは現代でも未来でもなく、遙か遠い過去。私が目指す作品は百年以上前であっても違和感の無いもの。そして百年以上の時の重さに負けない強度のあるもの。版画を始めて約8年、ようやく理想とする表現に近付いてきました。今後も自身の美意識を追求し世間の流行に流されず、密度のある美を版画によって結晶化したいと思います。

新会友

中嶋 詩子 (札幌市)

雨のあがった午後、水面に風が渡り波立つ。一瞬で変化する美しさに惹かれて今回の作品を作りました。

私の力量では無謀かと思ながらも風の作る様々な情景を自分なりに表現できれば幸せです。八剣山の麓に転居して5年あまり、緑の香り、鳥のさえずり、森のざわめき、星の美しさ、大自然の豊かさを味方にしてこれからもさりげない景色の中に私の風を見つけてゆきたいと思います。

新会員

重岡 静世 (小樽市)

初出品から50年でここまで辿り着きました。続けて出品して来たのは、この会には魅力的な作品が沢山有り又、暖かいアドバイスを沢山いただいた事でした。油絵の大作より版画の方が向いていると思い、60才から版画で出品しています。改めて本腰を入れて学び始めた事が実り、描きたかった福島第一原発の事故のため「野良の牛」にせざるを得なかった、酪農家の想いを少しは表現できたと思ううれしいです。

会友賞

岩谷 信昭 (札幌市)

30年前某大学講堂新築工事を担当した時に版画家作品を拡大アートモザイクで施工したことが思い出され、これが版画に魅せられたことだと思う。特色を生かした作品をと今年も頑張ったがまとまらなかった。毎回の様に作風が変わるとよく言われる。今は作風を定着するのは私自身至難な事でもある。何時の日にか納得出来る作風になれることを祈って暫くの間は自由に制作したい。

初入選

相馬 瑞恵 (札幌市)

銅版画を始めてまもなく、小さな頃からアイスホッケーをしている甥達の活躍した知らせを聞き、是非作品にしたいと思いました。それから約二年間続けていますが、氷上でのバランス、スピード感など段々と作品も変化してきたように思います。まだ違った描き方ができるのではこれからも続けたいテーマです。なにより甥達が喜んでくれたのがうれしいことでした。

彫刻部門

新会友

竹村 孝夫 (北斗市)

彫刻に出会った頃はとても難しく良くわかりませんでしたが、仕事の休憩時や夜に本や作品集を見て「彫刻とはとても不愛想なもの、胸襟を開いて近づいていかない限り何も語ってくれない」という言葉でフツ切れました。自分にも作れたらと始め、現在に至ります。これまで全道展の彫刻・絵画の先生方をはじめ色々な方々からの助言や励ましの御陰と感謝しております。

新会員・会友賞

佐々木甲二 (札幌市)

全道展に出品し、7年目となりました。出品の動機は、大学の先輩達が活躍の場としており、自分も多くのことを学びたいと感じていたこと、作品、求める表現にはスケール感や環境が必要であることから、継続して制作し発表できる場を求めていたところにあります。石と鉄を素材に、フォルムの美しさや力強さ、存在感や生命感などをテーマに制作しています。今後も多くの刺激を受けながら作品を展開させていきたいと思っています。

初入選

金子 智広 (釧路市)

私自身の中で、粘土をつける感覚が明確に変わってきた作品を出品しました。観ていただいた方の心に、少しでも心地よい風が届いてくれれば幸いです。この作品を1つの始まりとして、一步一步彫刻を深めていく中で、どんな世界が見えてくるのか、今から楽しみです。

工芸部門

佳作賞

阿部 綾子 (福岡市)

オホーツク紋別生まれの札幌育ち。結婚後は、家族の仕事の関係で全国を点々と。昨年までの八年間は千葉県に、これまでの人生の中で一番の都会…。渴いている。時も風も。カラッポ。街の雑踏の中でそんなことを感じていた私。作品に。これからも、子供のような心で、感じて感じて、創っていきたい。

新会員

新聞 千裕 (小樽市)

私が硝子と向き合ってから、14年目になります。毎日、1300度の窯の前に立ち、柔らかい硝子をひたすら扱う。一瞬で硬くなっていく硝子を優しくなだめる様に成形する。全道展に初出品してから10年。なかなか思うようにいかない未熟さを感じながらも、素材の魅力を生かしながら、少しでも自分を表現できることが嬉しく思います。これからも、硝子に正面から向き合い自分を高めていきたいと思っています。

新会員・会友賞

楠木 康仁 (幕別町)

老後の楽しみにと始めた焼物、小さな窯も自分で作り失敗あたり前の日々なのに、なぜか今まで飽きもせず続ける事が出来た。

同じ仲間なのに生活のしやすい浅い海はアンモナイト、生活のしにくい深い海に追いやられたオウム貝、恐

竜と共に絶滅したのはアンモナイトだ。深い海で我慢の生活をしたオウム貝は今も生き残っているという。今回、会友賞を頂いたオウム貝の心で、先輩会員の見習生になって付いて行きたい。

初入選

宮本瑠美子 (北広島市)

天然素材にこだわり、麻糸と綿糸を使い緋染めにしたタペストリーです。

アカネの赤、カモミールの黄色、スペアミントの緑、ローズのグレー、藍の青そして柿渋の茶。

整経した縦糸をとろどころ色が入らないようにしばり、柿渋で染めます。織機に糸をかける時は隣り合う色を少しずらしてみました。横糸を一段一段織り重ねていくと、まるで土の中から目を覚ました草木のように見えてきました。自然の贈り物に感謝です。織りを続けてきて良かったです。

開放区 エッセーコーナー

— 黄金の色 —



(絵画) 池田 宣弘

19歳の時でした。当時通っていた教室に憧れの画家、H先生が講師として招かれていました。その日は花を生けた白い花瓶の静物画の授業でした。

先生は余程見かねたのでしょうか、傍らに連れられ『手を加えて良いかな?』そして即座に白と黒の絵の具を、次にイエローオーカーを少し混ぜ素早く練り始めると一気に花瓶の陰の部分に上下にまっすぐ筆を下ろされました。すると丸い温かみのある乳白色の花びが見事に浮かび上がったのでした。そして『イエローオーカーは黄金の色といわれている……』私『??』『この色は他のどんな色と混ぜても深みのある色を出せる、描き方でまさに黄金の色も表現出来る。変色はしない、乾きも速い、おまけに値段が安い、上手に使いなさい』。田舎から上京し知識のお粗末な私にとってそれは目から鱗でした。以来パレットの上には常に大きく盛られ大切な色となっております。その後長い年月が流れ幸運にも昨年42年振りに、とある会場でH先生と再会する事が出来ました。80歳の長老は雲の上の存在でしたが当時の思い出やイエローオーカーの話を見せて頂くと大変懐かしそうに喜んで下さり、最後に励ましの言葉を頂きました。感動の日でした。未だ拙い私ですが駆け出しの頃の忘れられない、わずか一片の大切な黄金の様な思い出です。

— 私の楽しみは…ボランティア —



(版画) 浅川 良美

動物園ボランティアを十数年続けていると、同情したくなるほど不幸な反応をされる動物がいる。それは、9割の方が苦手とする爬虫類・蛇。昔『人は見た目が9割』という本があったが、蛇を嫌う理由はその体形に

あるのだろう。彼らは、土中に餌を求めて、邪魔な手足を退化させ、細長い体をくねらせて前進する、独特な運動様式を確立した。その筋肉はスパイダーマンの糸にも匹敵し、将来は、年齢と共に衰える筋力の回復研究につながるかもしれない程だ。体表のウロコは、目をも覆い、瞼を不必要とした。丈夫なウロコに守られた目は、土中、水中を直進しても、痛くないし、ドライアイにもならない便利さだ。就寝中や冬眠中も敵から瞳が見えるので、不意に襲われない。また、何億年の時を経て、ウロコは羽毛に進化し、布団の中味となって熟睡を支えている。チョコチョコ出し入れしている舌は行儀悪いが、臭いをかぎとり、鼻風邪でも美味しく食事できる。年頃の娘から「お父さんの足が臭い!」とは絶対言われたい強みもある。このように利点を書き連ねても『ルックスに勝てない』蛇ですが、治癒力や再生の象徴として世界保健機関のマークに使われています。財運から芸術まで多岐にわたるご利益で人気の弁財天様。これからは、蛇を長い目で見て下さりますよう、お願いします。

特集

作家探訪～「浅川 茂」

作品はまさに精神の発露

取材・文：梅津 薫
カメラマン：田崎 謙一

2014年4月8日、帯広の会員「浅川茂」氏を訪ねた。この日は雲一つない青空で、十勝連山は写真のコラージュのような輪郭をもって立ちあがって見える。

午後3時、浅川茂のアトリエに到着。彼は25年間でアトリエを8度も替えたとのことだ。ここは友人から借りている。昔の社宅で平屋、アトリエはその八畳間である。他にベッドの部屋と作品庫がある。八畳間は作品と絵の具ケース、椅子で埋まり、100 S（第69回全道展出品予定）が一枚壁に立てかけてある。ほとんど完成しているらしい。その周りは小品の山。装飾品？と言えば色褪せたジャズポスターと香月泰男のチラシだけである。

自宅は別にあり母と同居。制作時はこのアトリエに通ってくる。夕方から制作を始め、ここに泊まって、朝自宅に帰る、を繰り返す。住居と制作の場所は明確に区別しているという。

戦後、両親が樺太から命懸けで北海道へ引き上げて函館に居住する。彼は1947年に函館で生まれた。その後父の仕事で、釧路、白糠へと移り炭坑の閉山により鹿追へ転居し、農業を始めるが、父が若くして病死、残された家族と帯広に落ち着いた。

油絵を始めるきっかけについて彼はこう語った。

「20歳半ば、人生に生き疲れ、救いを求めるように絵を描きたいと思った。絵具屋に走った。知識は全くない。周りの人たちを真似るようにして材料を揃えた。描き方は全くの我流である。師匠はいない。」

こうして今に至っている。今では心惹かれる作家（心の師匠）が胸の中にある。香月泰男、鳥海青児、松本俊介、中間冊夫である。浅川はこの四人の絵画に、自分と同じ生きるうえでの「精神性や皮膚感覚」を感じたのである。これは必然であった。

公募展挑戦は1971年の新道展初入選（テーマは道路工事用の車、ロードローラー）であるが、その後全道展を見て感動し、1972年第27回全道展（丸井・今井）に初出品し現在に至る。同年第47回平原社展（帯広市民会館）、同年第40回独立展（東京都美術館）に出品をはじめた。いよいよ浅川茂という絵描きの始動である。

しかし、この頃の彼のテーマは時流の「モノ派」的なテーマだったようである。ドラム缶や土管などが一貫し

たテーマとなり、その中でマチュールや色使いの格闘が始まる。

その長い制作の中で彼は常々、もっと自分の心に響くものを描きたかった。そしてしっかりと来る小品も描きたかった。しかしもどかしく時間が経っていく。小品が描けない。ためらい、悩んだ。もっと精神的なものを追求しなければ！ そうして40年近くが経過する。

60歳頃仕事を辞めた。生活は苦しくなったが、何故かその頃から自分が求める「何か」が仄（ほの）かに見えるようになった。

ある時「日本近代洋画の巨匠展」を観た。自分の作品と比較し、自分の求めている「何か」が確信に変わった瞬間である。

2012年10月、浅川はついに札幌で個展（すべて小品）を開いた。

「浅川茂展 遠い日々の心象 1980-2012」（札幌大同ギャラリー3F）

自信（確信）はあったが、その分、不安も大きくなっていく。作品が売れた。認められた証。

続いて2013年10月「浅川茂 遠い日々の心象 II 1984-2013」を発表。（札幌大同ギャラリー3F）

2013年、道立帯広美術館の企画展の出品者の一人として選ばれる。

「道東アートフェスティバル2013 in the Light/in the Shadow」（「ひかりのなか」と「かげのもと」）2013年11月22日（金）～2014年2月2日（日）北海道立帯広美術館主催





同展のカタログのなかで当時の学芸課長・鎌田亨氏は浅川について次のように述べている。

「……浅川にとって作品は思索の場である。……作品はまさに彼の精神の発露であり、ゆえに深奥から無二の輝きを放つのである。」

浅川は作品を作るに於いて、スケッチは一切しない(アトリエの壁に構成のための鉛筆スケッチが貼ってあったが、あくまでもイメージスケッチである)。

テーマは天地を支配する一輪の花のようであったり、民家のような塊、水と空、大地から発する光や陰が一体化したものである。それは浅川が幼い頃から見てきた、心に焼き付けたイメージである。じつはそのイメージは浅川がその時、世界をどのように見ていたのかということであり、むしろ浅川を知る上では後者の方が重要かもしれない。

彼は言う。

「私が表現したいのは、物そのものを描くのではなく、物(イメージ)とそれを包み込む空間とが一体化したものである」

取材を終えての帰路、車を運転しながら田崎が言った。「いまだにピュアな気持ちを持っているな」と。

饒舌でなく、考えるように重々しく話す彼の言葉は真摯であり、いつも自分と語りあっているようである。

こうして取材を終えて思うことは、浅川作品を評価する言葉は今後、種々出てくるだろうが、あらためて私なりに言い直せば以下ようになる。

表現された世界は、「物・空間・気配」が一体化したものの、それはまさしく浅川茂の「意識の具現化」である。

第70回記念 全道展

2015年6月10日(水)～21日(日)

授賞式・パーティ

2015年6月13日(土)・18:00～ 全日空ホテル



第69回 全道展 札幌市民ギャラリー

第56回 学生美術全道展

2014年10月11日(土)～10月13日(月)

※ 月曜日は臨時開催します

札幌市民ギャラリー

授賞式・作品批評会

10月12日(日)13時より

創造と思索



心の沼

版画 吉川 勝久

Zen46号にY氏が引用された茨木のり子の詩「みずうみに」、私も4年ほど前に出会った。「…人間は誰でも心の底にしいんと静かな湖を持つべきだ…人間の魅力とは、たぶんその湖のあたりから発する霧だ…」

そのとき、「あー私の心にも、湖のように大きくはないが、しいんとした沼があり、そこから発する霧の形を作品にしようとしているんだな」と思った。

それは何のためか……たぶん人はみなそれぞれの方法で世の中に自分をつなぎ止める（生きている意味を確かにする）努力をしていて、自分にとって、今はそれが作品づくりなのだろうと…

絵画には、「造形的」なもの「思想的・文学的」なものがあるとの評があり、おこがましいが、私の場合は前述したように後者なのだと思う。それは、美術的な教育を受けていないことも大きな要因だろうが、これまでも思想的・文学的な臭いのする作品に心を動かされることが多かったことから、それは（版画を選んだことも含め）私の「資質」によるものなのだろう。

優れた造形・色彩の作品に出会い、「あーあんな風に創ってみたい…」と思うこともあるが、安易に飛びついてしまうと、私の作品の成り立ちの「核」を見失ってしまいそうで、当面は心の沼の周りをウロウロすることになっている。

沼から発する霧が様々な事象（情景であり出来事であり…）に触れて形を成そうとし、それを描きとめていく。それが独りよがりな自己表出に終わらないよう、可能な限り距離をおき時間をおき、極力一鑑賞者として対話しながら仕上げようとするが、これが何ともしんどい過程で、適当なところでお茶を濁すことが多いのが現状。

今後は何とか粘り強く仕上げ、観ていただく方の琴線に少しでも触れられるようなものができればと思う。

もう一つ大切なことは、沼が干上らず霧を発し続けるよう、時には病んだ現実からも目を背けず、人間としての「思索」を怠らないことだと思っている。

真白い糸が 布になるまでには

工芸 片岸 法恵



『創造としさく』と言う題で原稿をお願いできませんかと電話をいただいたとき、『試作』と言う文字を思いました。

織物には仕事の手順に試染、試織という『試作』が付随しているからです。そんな訳は無いと考えましたが、『思索』と分りちょっと悩みました。

しかし、それは作品のデザインをするまでに行っていることと気づきました。

工芸は『用の美』という『使う事』を前提にしている分野で、太古から連綿と受け継がれている手仕事です。創造の余地はごく少ないと思われがちですが、真っ白い糸が布になるまでには多くの創造と、長い思索の時間を経ています。

私は窓から見える風景を作品にしています。家の窓、車の窓、電車の窓、窓はどこにでもあり、窓から見える風景は時と共に移り変わり、多くの思いを抱かせます。

「風」「空」「雲」「雪」「黄葉」「カラマツ林」……単語は組み合わせられ思いを表す言葉となります。思いをデザインにできるまで、私はその言葉を呟きつづけます。

思いはデータを元に、やりたい事とやれる事の取捨選択と、新たな試作を経てデザインとなりますが、それには時によっては何年もかかり、思いの呟きはの間続くのです。

デザインが決まると、多くの工程を経て最後に織られて布になります。

デザインが決まってからも、機に糸をかけ織り始めるまでには織る時間の何倍もの時間を必要とし、その長い時間の中で窓からの風景は移り変わり、さらなる思いが加わり、発展し、変更を加えたくくなります。

けれど、織物は入念な準備のもとに作業を進めなければ必ず支障をきたし、整経という作業の後にはどのような変更もおおきな障害となり、作品に仕上がらないという大惨事を引き起こすことになります。

織物は織り始めると一つの作品として終わらなければなりません。

ひとつの思いは次々と発展し、「次はあの技法を…」「あの色を…」「あの糸を…」と手を休めると「次は、次には」の考えが湧き上がるのです。

思いが一つの作品の中で完結できることはありません。「次は、次には」の繰り返しで、創作に終わりは来ないのです。

Zen 紙上美術館へようこそ

世界に一つだけのミュージアム、それが Zen 紙上美術館。どうぞゆっくりご覧いただき。

貴婦人と一角獣

La Dame à la Licorne

伏木田 光夫



タピスリー 《貴婦人と一角獣「我が唯一のぞみ」》
1500年頃 フランス国立クリュニー美術館蔵

もう35年も前の話になってしまうが、パリのクリュニー中世美術館の「貴婦人と一角獣」という6枚のタピスリーを実に良く観にいったものだった。僕にとって限りなく美しきものに、このタピスリーは入っていて、その前に立つと中世末紀、おそらくB.C. 1500年頃、織られたであろうこの雅いた朱色には魂をうばわれたものだった。その頃は20世紀の画家達が夢中になっていた、絵画空間は平面ではなくてはいけないという命題に僕も直面していたので、このタピスリーの織もの故に楽々と手に入れている、平面空間の豊饒さには目を剥いてしまった。下から上まで一様に同じ朱色の空間には天と地がまるでモネのあの睡蓮を描いた晩年の作のように溶けあっていて、画面のいかなるところにも色彩がかすむことなく存在していることの驚き。絵画空間とは「これだな！」と思ったものだった。

昨年、この6枚のタピスリーが、そっくり東京の国立新美術館に展示されたので、日本でも観る人は見て、その美しさには驚かされたことだろう。

さて、この限りなく美しきものは、僕の内面では静か

に息づいているものになっていて、生の感覚のなかで成長していくものなのだろう。今ではもう一つの芸術を成立させる骨格のことを考えている。一つは抽象でもう一つは象徴であるのだが、いずれも抽象主義や象徴主義まで高められ現代芸術を導く美学まで成長するのだが、改めて、こうして「貴婦人と一角獣」を観ると、そのおらかなさにゆったりと時間のなかで形成されていった象徴性の深さに打たれる。果してこの一角獣というライオンと貴婦人はいかなる世界から来たのだろうか。僕には心ひかれるヨーロッパにおけるマリア信仰や中世の世俗界における騎士道の思想が、このタピスリーに結晶しているのではあるまいかと思うのだった。貴婦人の幻妙なる魅力は「触覚」「味覚」「嗅覚」「聴覚」「視覚」「我が唯一の望み」と6枚のタピスリーになっているのだが、ダンテにおけるベアトリーチェのように、恋人の妖しさを持つ貴婦人からマリア信仰における神性まで、なんと見事な虚無と無限からの象徴なのだろう。そしてひざまづく一角獣やライオンの姿はなんと騎士道精神のストイックさと甘やかさを持つ象徴なのだろう。

ライナー・マリア・リルケは「オルフォイスへのソネット」で「一匹の純粹な獣が／いつもただ存在の可能性だけで養っていた／そしてその可能性がこの獣に力を与え／その額から角が生えたのだ／一本の角が。と詩ったが。無限と虚無から有限の世界に形成される象徴作用を僕達は再び武器としなければいけない。

第4回

全道展新鋭展

2014年10月30日(木)～11月4日(火)

大同ギャラリー

札幌市中央区北3条西3丁目1

札幌大同生命ビル3・4階

011-241-8223

オープニングパーティー

10月30日(木)18:00～

自由と不自由の間

(絵画) 渡辺 通子



絵をまだ識らない20才頃に、松方コレクション展を見た。一枚の絵に胸を衝かれた。シャヴンヌ「貧しき漁夫」……好きというより向こうから訴えかけてきた。

教育も文化も、豊かさとは無縁の環境。薄い壁一枚で互いの暮らしが丸見えだったあの頃。外では遊ばず、いつも母親の傍にいて手縫いを真似た。鉄道官舎では色々な事が日々起きて、10代の少女はいつも不安におびやかされていた。大人になりたくない自分はこの時期に造られた気がする。目が悪くても眼鏡などなく目を細めて見ている。見えない目というのは逆に認識力を強め、感情の在処が見えていた。感情は雰囲気をもたらし、雰囲気は仕草として形を表出する。型ではなく形というもののリアルな捉え方。ぼんやり映る形に気配が宿り、気配は意味を伴った。20才の時に辞書と万年筆、結婚後に絵の具を贈られた。それらは今も大切な宝物。仕事には就かず家に居てたくさんの画集を漁った。絵を描き服を縫い、様々な素材で遊び自由に生産的な？時間を満喫した。とはいえ、悩みを抱えて不安な時には絵は描けず、吐き出すように詩作に向かった事もある。29才で全道展初入選。30才の時一念発起、武蔵野美大の通信教育を受けた。1年目40日間、余りの暑さで2年目は20日間。事情が出来て3年目脱落。初めての彫塑や石膏デッサンを汗だくで学んだ。或る休み時間にノミだらけの弱った猫を見かけ水場でノミとりに夢中になっていたら「始まっているぞー」と誰かの声。後ろ髪引かれる思いで教室に戻った。その頃絵を描く事と人生をどう生きるかが繋がって見えてきた。内面の問いは、その意志に於て自然に線になり2回目入選作以降は線が主体に……。

あの頃は、誰もがハングリーを合言葉にしていた。意味は違うが、私も貧乏と向き合う事は成熟への一つの道筋だったと思っている。だから、内面の価値を見失わずに、今居るこの場所に辿り着けた気がする。

等身像を応募作のメインに、
でも評価されたのは……

(彫刻) 水野 智吉

自分にとって、全道展の「あの日あの時」を考えて行くと、やはり初入選や初受賞の頃にたどり着きます。私が応募し始めたのは、今から23年前の1991年に行われた第46回展からです。当時私は、北海道教育大学函館分校の3年生で、故秋山沙走武先生の彫塑研究室で彫刻を学び始めてから、2年目を迎えていました。



多くの先輩方が、入選し受賞もされている様な環境だったので、私もその様な場所で力を試してみたいと考える様になり、挑戦することにしました。3点の作品を制作して初めて応募し、運よく初入選を果たすことができました。成果が出てとても嬉しかった一方で、先生や先輩方、多くの作家の方々と一緒に作品が並ぶ事に、とても緊張した事を憶えています。入選作は「裸婦立像」という高さ125cmの石膏の全身像でした。全身像2作目のまだまだ未熟な作品を、よく入選させていただけたのだと、今更ながら思っています。初受賞は、翌1992年の第47回展において、「ユリ」という胸像で奨励賞をいただきました。この胸像は、初めて乾漆を用いて制作した作品でした。この年には、等身像を応募作のメインとして制作していて、胸像はその合間に制作していたものでした。

受賞出来た事はとても光栄で嬉しく思いましたが、力を入れていた等身像が落選し、あまり気にかけていなかった方の作品が評価されたことに、素直には喜べない複雑な気持ちでした。作品は、大小や作者の思い入れなどとは全く関係なく、作品自体で評価されるものなのだ、ということを感じさせられました。その後私は、等身像での受賞を目標として、制作に邁進して行きました。そして、翌1993年の第48回展において、卒業制作であった乾漆の等身像によって、2度目の奨励賞を受賞させていただきました。思い出すままに書き進めてきましたが、全道展には多くの事を学ばせていただき、育てていただきました。これからも、全道展が素晴らしい研鑽の場であり続ける事を願っております。

テーマは日々の暮らしの中に

(版画) 大井戸 百合子

全道展と私は今年で69回展、69歳になる。

私は美術の仕事をして約50年、この間の半分は美術の指導、半分は制作をしてきた。

私にとって指導はいつも楽しい。4歳～大人まで美術を通して人とかわることは、幸せな時間だと思う。人間の顔が違うように、出来た作品も同じものはない。作者の性格や心を見ることも出来る。数十年もしているのに、自分の力不足をつくづく感じる。美術とは、はてしなく無限なのだと思う。

制作の方は物心ついた4～5歳から始まっていた。私は自分が体験したことを一貫して描いてきた。テーマは「日々の暮らしの中にある」。

生まれたのは札幌の山鼻地区で東屯田通り、当時数軒残っていた屯田兵の家で、子供の多い両親は大木と畑にかこまれた古いこの家を借りていた。私は7番目の末っ子である。

戦後の混乱期、どこの家も大変だったけれど、社会に活気とエネルギーはあふれていた。

我家にも夫婦喧嘩をして飛び込んでくる人、玄関先で涙を流して夫が出ていってしまった、と母に訴える小母さん、洞爺丸台風で夫が死んだから赤ちゃんを預かってほしいという若い母親、色々な人が毎日やってくる。特に覚えているのは、沢山の子供がいるので母の市場への買物、魚屋さんとのやりとりや八百屋の小母さんとの長話、私はいつも側で見ていた。その後、山鼻小学校に入学した。担任の先生は、亡くなられた全道展の原義行先生、原先生は当時30代で琴似の自宅から自転車で通っていた。私は学校の図画はさっぱりダメで天気の良い日は木登り、悪い日は姉や兄の雑誌のさし絵を見て、それを描きうつす。自分の描きたいことばかりに没頭していた。11歳の時に現在住んでいる藻岩山登山口の側へ引越してきた。10歳までに体験したことがその後の「市場」の版画になっていった。

今は50年前とは生活も価値観も社会も変わった。私の日常生活にも得体の知れないテーマがやってきた。

それをどう描くかを私は悩んでしまう。



四勝五敗の負け越しスタート

(工芸) 吉田 義彦

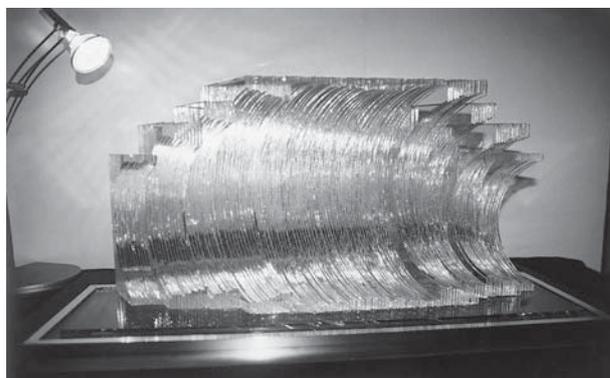
全道展工芸部門に初めて出品したのは、スタンドグラスだった。しかし、規格外(大きくて)で落選。ようやく初入選は果たしたが続かず、入選、落選を繰り返し9年目、四勝五敗の負け越しである。どのような作品が良いのか、自分でも分からなくなり思案している時、今は退会された工芸部門の関川会員から、作品の方向性を変えて出品したらどうか、とアドバイスを受けた。それで10年目より、積層ガラス(板ガラスを特殊なボンドで接着したもの)のオブジェを出品するようになってから、毎回入選することが出来た。奨励賞、会友賞を頂き、第63回展で会員に推挙され、現在に至っている。

思えば、公募展審査発表の日はずいぶん早く起き、新聞紙上にただ四個の自分の名前を探し、無かった時の落胆、情けなかった自分の姿が、今でも目に浮かぶのを思い出す。

会員になる前は、どんな方向で入落を締めるのか、非常に興味があったが、作品審査をする立場になり、入落を決める判断が大変に大事で難しい事に気が付き、毎回勉強になっている。

落選した出品者に、かつての自分がそうであった様に、いかに適切なアドバイスを与えることが出来るか、その大切さが良く分かるだけに、機会が来たらそれが出来るような会員として努力したいと思う。

また、初めてこの世に生を受けた赤子のように原点に帰り、ここ富良野の地で作品の制作に励みたいと思っている。



初入選の作品「パイプライン」

—歴史に新たな一歩を—

「全道展 70 周年記念企画展 〈会員・会友展〉」に向けて

70 周年記念企画展
実行委員長 川本 ヤスヒロ

全道美術協会は来年、創立 70 周年の大きな節目の年を迎えます。全道展では、記念事業の一環として、50 周年、60 周年展に引き続き、北海道立近代美術館において 10 月 31 日(土)～11 月 8 日(日)まで「全道展 70 周年記念企画展〈会員・会友展〉」を開催いたします。

20 年前の 50 周年記念企画展では、出品対象者は会員のみで、過去の作品の自選とし、絵画は最大 150 号以内と決め、3 名の会員がこの大作を発表しました。作者の自信作、あるいは代表作とあり、会場は熱気に溢れました。

また、60 周年記念企画展は「60 年 全道展の魅力」のタイトルで開催。現会員と創立会員 21 名の作品、及び全道展で長年事務局長として貢献された本田明二・砂田友治両会員の作品での展覧会でした。絵画は 130 号横幅以内で新鮮な創作（新作）作品が出品されました。なお、10 月 30 日(日)には伊藤進氏（北海道教育大学教授、心理学）による『想像力とは何か』と題した講演があり、その後、会員 4 名（岡沼淳一、木村由紀子、福井路可、高橋要）と佐久間恭子会員の司会で実技を含むトークショーがありました。このトークショーは、文字通り全道展の作家の魅力が充分に発揮された印象に残る催しでした。10 日間の会期中 3,877 名の入場者があり、懐かしい創立会員の作品と久し振りに対面できた展覧会でした。

さて、来年の 70 周年記念企画展ですが、昨年 6 月の総会及び同年 12 月の拡大会議で承認された、12 名の実行委員会を中心に、開催に向けての準備を進めているところです。4 月 18 日には 6 回目の実行委員会を開き、企画の

具体的な計画内容についての話し合いを行いました。

現在の全道展をしっかりと認識し、今後更に会員・会友が切磋琢磨しあいながら、熱意を持って 70 年の歴史の上にまた新たな一歩を踏み出そう、との思いを込め、キャッチフレーズを考え決定したのが『70 年—新生する全道展—』というタイトルです。

企画展では未発表作（道外発表作は可）とし、部門にこだわらず、テーマは自由です。今回は、会員・会友合同展のため作品数が多くなり、絵画は最大 100 号横幅（162 cm）以内に制限します。20～30 号での出品にぜひご協力願います。

また、企画展の他に 10 月 31 日(土)の開催初日、美術館講堂で村田真氏（美術ジャーナリスト）を招いて、『公募団体の存在意識、今後の可能性』のテーマで講演会を開催します。終了後はワークショップを計画しています。更に会期中はカレンダー（A4 サイズ、カラー、表紙＋12 カ月）を販売します。ちなみに 60 周年記念ではポスターを販売しました。

来年の 10 月と、暢気に構えていられないのが特別展です。実行委員 12 名も 50 周年、60 周年展との違いを意識し、内容をより深めて行こうと思います。

70 周年記念企画展を、内外にアピールするためにも、充実した展覧会になるよう、ご協力をお願いします。

70 周年記念企画展 実行委員は次の 12 名です。

実行委員長	川本 ヤスヒロ
副実行委員長	梅津 薫
会計部長	福島 孝寿
副部長	山本 恒二・竹田 道代
事業部長	渡辺 貞之
副部長	波田 浩司・竹田 道代
庶務部長	佐藤 仁敬
副部長	宮地 明人・馬場 雅己
企画部長	川上 勉
副部長	阿部 俊夫・馬場 雅己

来年に繋ぐ

—第 69 回全道展—



自然との共生を 自らの命題と位置づけて 谷口一芳展 開かれる

■ 2013年10月10日～11月24日

—— 小川原脩記念美術館
(絵画) 坂口 清一

晩秋の激しく流れる雲間から蝦夷富士を眺望し、谷口一芳展—私の生きた証を—の会場入口に立った瞬間、一芳さんが両手を広げ迎えて下さっている姿を幻覚した。それは全道展の大先輩とし、また麓彩会の仲間として通じ合う心がそう感じさせたのだろうか。「梟 フクロウ＝谷口一芳」であり、会場をフクロウたちが幻想の世界を演出していたからであろうか。



1953年頃と推測される「巣立ち」(エゾフクロウ・野幌) F6は、2羽の梟の生命力と大らかさに深い感動を覚えた。谷口さんは、未知の世界に巣立とうとする無垢な姿とつぶらな瞳に一目ぼれし、生涯、梟をモチーフとして制作された。「巣立ち」は原点であり、感動と好奇心の探る目から生まれた貴重な作品と思う。

およそ各年代1点を厳選し38点中30点は梟たちへの華麗な夢をもち続け制作された作品群でした。

1978年には、あこがれのシロフクロウにどうしても本物を見たい一心でアラスカ・北極海地方への探鳥ツアーに参加して感動の出会いを果たした。幸運な出会いから制作の意図と表現の進化が顕著で、熱烈な探究心と制作意欲に敬服させられた。

1960年頃は「原始の美(生命力・大らかさ・素朴・単純さ)等に深く感動し、それを制作へのねがい」とし、1968年頃には、野の鳥をつかい、さらに架空の鳥をつくり擬人法で豊潤な色彩をもって陶酔、極致、幻覚、夢想など幸福と不安さの感動を表現するねらいで制作されていた。

2000年前後の作品には、梟群の中に谷口一芳さん自身が表現されている感じがしてならない。特に2011年の「森は生きている(II)」は、地球の自然環境の現実を見つめる大きく見開いた右目と未来を憂える左目、静かに呼びかける口元は動植物たちと、おごることなく共生を

ねがう一芳さんの自画像に感じられた。

展示最終の「フクロウコレクション」は、ペンによる素描で豊かなイメージを表出し、制作活動が継続できた根幹を知ることが出来た。一谷口一芳の生きた証を一展は、遺作展を感じさせない素晴らしい会場構成でした。

柔軟で繊細な魅力の作品 「佐藤フサ子回顧展」

■ 2014年4月2日～4月6日

—— 苫小牧市美術博物館
(絵画) 梅津 薫

4月2日(水)午前10時20分頃到着。苫小牧市美術博物館は、柔らかな芝生の広がる公園と、その日雲一つ無い青空に包まれた心地よい空間に建っていた。

同館初めての試み「市民に貸し出す展示室」の第1号がこの回顧展となる。この企画は故佐藤フサ子さん(全道展会員・2009年12月没)を思う10数名の実行委員会からなる。中心の佐藤静子さん(全道展会友)は「数多い作品からかなり厳選した」というとおり、とても緊張感のある展示となった。

展示は全23点(内100号～120号が17点)。

作品をみると、フォービズムやキュビズムの影響が形や構成に現れているが、そこから独自の表現に昇華しているのは「遠藤未満」(故人、全道展会員)に師事したことによる色彩の効果であろう。暗い人物像の塊と背景の鮮やかな色彩対比は何とも言えず佇んでしまう。そこに探求的で厳しく見えるようでありながらも、柔軟で繊細な彼女の魅力が加味されている。そしてよく見ると、モチーフはどれも彼女の周りであった現実的なものようだ。長男が子ども時代に使用していた昆虫網、実際に飼っていた鶏、アトリエの壺などである。フォルムや構成はあくまでも絵画の探求だが、その根っこはリアルアーティストであった。

実行委員(佐藤静子、小笠原実好、中丸茂平、菊地章子)さんたちの思い出話をお聞きし、今でもフサ子さんを慕っているぬくもりを胸に抱いて、苫小牧を後にした。



企画展に尽力された左から佐藤千代子、佐藤静子、小笠原実好、中丸茂平、山上正一の皆さん。

全道展 若手作家の活躍 昨年はロシアでも

札幌展 3/17～3/22 青森展 3/29～4/6

北海道ゆかりの若手美術家による「サッポロ未来展」は13回目を迎え、札幌時計台ギャラリーに次ぎ、今回は初めて青森県立美術館でも開催された。

道内からは25名、そのうち全道展関係は絵画の宮地明人、佐藤仁敬、彫刻の佐藤志帆など7名が出品した。

次世代を担う2つの地方の若手が、文化交流を通して相互理解を深める大きな機会とあって、今後の活動もより活発化しそうだ。



未来展青森交流展会場

デパートで初の企画展

—2013.11.13～11.18—

絵画・版画の8名による「北のアーティスト ロトンヌ展」が丸井今井札幌本店で開かれた。

全道展は創立以来約30年間、ほぼ[㊦]今井で開催されており、今回、初のデパートでの展覧会が企画された。



ロトンヌ展会場

「ロトンヌ」はフランス語で「秋」。会期中には版画のワークショップも開かれ、参加者は講師の渡会純价会員の手解きで作品制作に臨んでいた。

全道展ピンバッジを作製

昨年の春、相次いで他界された絵画の八木保次・伸子さん夫妻が遺された基金をもとに、全道展ではピンバッジ500個を作製した。デザインは夫妻と深い親交があった版画の渡会純价会員が担当し、淡いパープルを基調にしたおしゃれな仕上がりになっている。



それでもワシは鉄の道を行く

昨年11月に54歳の若さで逝った、橋井裕さん。

お別れの夕べで配られた遺稿には、ユーモアと平和、そして全道展を愛した、一人の作家の言葉が綴られていた。いかにも橋井さんらしい、その一部をご紹介します。

北海道平和と美術30回展記念誌に掲載の「吾輩はまだ生きている」と題した内容一居住する小エリア内での日々の平和な生活に、幸福を思う一方で世界を、我が国を、そして人間の愚かさを鋭く見つめる。「平和とは何だろう」と。自問自答を反芻しながら、とにかく、上手い、下手ではなく、平和を愛し一人一人が自分なりの美術作品で、この狂った世の中で、自分自身を表現していかなければならないと結んでいる。

Zen27号掲載の「僕の辞書」は、ア〜カ行までのユニークな解釈？が笑える。締め括りのコ・このあと[この後]全道展がまともな会で、皆々様と御一緒出来る様頑張りたく思いますので宜しくお願い致します。

サ行以降をぜひ、読んでみたい作家だった。

● 編集後記 ●

会員、会友、一般出品者のご協力に感謝。物言う芸術家の皆様、次回のZenもよろしくお願い致します。
(清野知子)

全道展会員一年目、Zen担当になり大先輩方の全道展への愛情を感じました。大した役には立っていませんが全道展に関わる皆様の力で良い交流誌になるよう頑張ります。
(澁谷美求)

試行錯誤を重ね49号を発行することができた。寄稿のご協力に感謝したい。来年は全道展誕生70年、Zenは50号を迎える。
(文責 米澤邦子)